

聖書：創世記 49：1～33

説教題：それぞれにふさわしい祝福

日時：2024年8月4日（朝拝）

創世記も残すところ後2章となりました。今週と来週とで読み終えることになりかと思えます。さてヤコブは前回、臨終の床でヨセフの二人の息子を祝福しました。それに続いて今日の章では息子たち12人を呼び寄せて一人一人への遺言を語ります。これは単なる個人的な言葉ではありません。1節でヤコブは「集まりなさい。私は、終わりの日におまえたちに起こることを告げよう」と言っています。「終わりの日」とはいつのことでしょうか。これはかなり遠い将来を指しています。続く内容から分かることは、主にここで語られているのはイスラエルが将来エジプトを出てカナン之地に定住する時の話であるということです。さらにはその約束の中心にある救い主メシアの到来にまで及ぶものとなっています。メシアが来られた暁にはどんな祝福が実現するのか。そのことも含めてイスラエルの歴史全体を包含するような言葉が預言的に語られています。またその内容は12人の子どもたち一人一人のこれまでの生き方や性質と関連しています。彼ら一人一人にふさわしい言葉をヤコブは語ったのです。

さて12人の子どもたちは三つのグループに分けて考えることができます。最初の6人はレアの子どもたちです。次は女奴隷から生まれた4人、すなわちレアの女奴隷ジルパから二人、ラケルの女奴隷ビルハから二人です。そして最後にヤコブが愛する妻ラケルからの二人となります。ヤコブの言葉に従って順番に見て行きたいと思いません。

まずレアの子どもの筆頭は3～4節のルベンです。「おまえはわが長子」と言われているように、彼はヤコブの最初の子でした。「わが力、わが活力の初穂。威厳と力強さでまさる者」と言われています。「だが、おまえは水のように奔放で、おまえはほかの者にまさることはない」と続きます。ルベンは35章で見ましたように、父のそばめビルハと寝ました。そのことがここで取り上げられ、非難されています。「彼は私の寝床に上ったのだ」と。このことがあって以来、ルベンは何度かこの創世記に登場しましたが、いずれもうまく事は運びませんでした。ヨセフを救い出そうとして失敗し、またベニヤミンをエジプトに連れて行くために父を説得しようと試みて失敗しました。彼はここで「おまえはほかの者にまさることはない」と言われた通り、今後目立

った働きをすることがない部族となります。

次は 5～7 節のシメオンとレビ。彼らは似通った兄弟で、「彼らの剣は暴虐の武器」と言われます。ここで思い起こされているのは 34 章に記されていたシェケムの人々を虐殺した事件です。妹ディナが辱しめられたことに怒り、彼らはこの町の男を皆殺しにしました。ヤコブはそのことに激しいショックを受けました。その「彼らの密議に加わるな」と言われています。そして 7 節では「私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう」と言われています。この言葉の通り、シメオンとレビはイスラエルの中で散らされることとなります。シメオンはやがてユダの一部として吸収され、また一部は北に散らされます。レビもそうです。しかし彼らは後にモーセに従って良い働きをしたこともあり、散らされることは散らされますが、各部族の中で大切な祭司の働きをする者たちとされます。

次は 8～12 節に記されているユダです。彼が前半の山となっています。「ユダよ、兄弟たちはおまえをたたえる。おまえの手は敵の首の上であり、おまえの父の子らはおまえを伏し拝む」と始まります。かつてヨセフについて言われたこと、すなわち兄弟たちが伏し拝むという祝福は将来ユダに当てはまると言われます。ユダは 38 章で大きな罪を犯しましたが、悔い改めを経て、リーダーとして頭角を現して来たことを見て来ました。その彼は獅子のように強いリーダーとなり、その彼からやがて王が出ると言われています。10 節に「王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない」とあります。次の行の「シロ」については解釈に色々な意見があつて、今日もその理解は定まっていなようです。新改訳はやがてユダから出る王が「シロに来る」と訳していて、これを場所と解釈しているようです。しかし第 3 版までここは「ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う」と訳されていて、シロはやがて来る王を指す言葉とされていました。他にもここは「贈り物が彼に献げられる」という意味だと取る人もいます。どれが正しいのか理解は定まっていますが、全体としてここは将来与えられる約束の救い主を指す預言であると見る点ではほぼ一致しています。つまりここはこのユダ族から将来、理想的な王ダビデが誕生し、さらにはまことの王イエス・キリストが出ることを預言しているということです。その時に諸国の民は彼に従う、すなわち全世界の人々が彼に従うようになると言われます。その後の 11～12 節はメシアが来た時の祝福を描いたものです。ぶどうは実がなるまで数年かかるため、通常はしっかり守られます。ろばをつなぐことはしません。もしそうしたら実を全部食べて

しまうからです。しかしメシアが来た時は祝福が豊かに満ちあふれるため、ろばをぶどうの木につないでも何の問題もないということです。そればかりか自分の衣をぶどうの汁で洗うようにさえなる。これはそれほど豊かであるという誇張表現であると思われる。12節は健康な人を描写した表現のようです。このようなメシアの祝福はユダ族から現れるのです。

レアの子どもたちの最後はゼブルンとイッサカル。13節に「ゼブルンは海辺に、船の着く岸辺に住む。その境はシドンにまで至る」とありますが、聖書巻末の地図を参照するとゼブルン族の土地は海に接していません。むしろ内陸部にあります。しかし海につながる通路を持っていたのかもしれませんが。そこから地中海沿岸のシドンに達することができたのかもしれませんが。イッサカルは麗しい地を受け継ぐと言われているようです。しかしそれと引き換えに苦役を強いられる、その代償を支払うことになると言われています。

次に語られる第二のグループは二人の女奴隷から出た4人の子についてです。最初の16～17節はダンです。彼も一つの部族と言われている。しかし蛇やまむしにたとえられているように小さい部族となるようです。ただし砂地に隠れた蛇のように奇襲攻撃をかけ、敵に勝つ働きをする部族となる。このダン族から将来、士師記に登場するサムソンが出ます。確かにこのイメージはサムソンに良く当てはまると見ることができます。

19節はガド。ガド族は後にヨルダン川東側に定住します。そのため、さらに東側にあるアンモン人、モアブ人、またアッシリア人などに襲われやすい地に位置することになります。しかしその彼らも反撃すると言われています。

20節はアシェル。この部族は地中海に沿った豊かな地を受け継ぎます。彼らは王にごちそうを出す部族となります。

21節はナフタリ。この部族は北方の地方を得ることになります。2行目の言葉は意味が良く分からないとされています。子孫が多くなるという意味ではないかと言う人もいます。また欄外にあるようにここは「美しい言葉を出す」と訳すことができますが、その場合、ここを受け継ぐ人たちが美しい言葉を発さずにいられないほどの場所

を得るということを意味するのではないかと言う人もいます。

最後第3のグループはラケルの二人の子です。22～26節はヨセフです。前半の山がユダだとすると、後半の山はヨセフになります。彼も豊かに祝福されることがまず22節で強調されています。23節は色々な苦しみを彼は経験して来たこと、兄弟たちから、またポティファルの妻から、などを指すと思われます。しかし24節にある通り、彼は守られました。それは神のおかげであるというのが24節後半です。ヤコブの力強き方の手によって支えられました。その彼にどんなに豊かな祝福が注がれるかが25節以降にあります。その祝福は永遠の丘の極みにまで及ぶと言われます。

そして最後27節はベニヤミンです。彼については「かみ裂く狼」と言われます。これはこの部族の勇猛さ、戦いにおける技術の高さを述べたものと思われる。

さてこれらの12人の子に対するヤコブの言葉を私たちはどのように読むべきでしょうか。その大切な視点を提供しているのが28節です。ここにヤコブのこれらの言葉は祝福のことばであると言われています。「それぞれにふさわしい祝福を与えた」とあります。一見、祝福とは思われない言葉も多く見受けられましたが、その基調は祝福であったと言われているわけです。実際、彼ら12人は主の前から一人として失われません。彼ら12人は神の民イスラエル12部族の基礎となります。このことを心に留めてもう一度このヤコブの言葉を振り返る時、次の三つのことを述べるができるかと思います。

まず一つ目は、ここにも神の救いはただ恵みによることがはっきり示されているということです。ヤコブの12人の子どもたちは決して完全な人たちではなく、むしろ問題の多い人たちでした。最初のルベン、シメオン、レビに関しては、ほとんど良いことが言われていません。このため、彼らは救いから外されたと結論で言われてもおかしくないところでした。しかしその彼らへの言葉も本質的に祝福のことばであったと28節で言われています。そして確かに彼らも救いを受けるのです。もし私たちが神の立場にあったら、こんな彼らを神の民の骨格となるような人々として選ぶでしょうか。しかし神は彼らを神の民の構成する重要メンバーとして選び、用いて行かれるのです。それはユダやヨセフにも言えることです。ユダも以前見ましたように大変な罪を犯した人でした。ヨセフにも思慮の足りない点や欠けた点が色々ありました。誰

一人として神の前に自分の功績を主張できる人はいません。ここに神の救いはただ恵みによるものであることが改めて明らかにされています。

しかし、このことは罪は大した問題ではないということの意味しません。二つ目にここに見るのは、彼らはみな救いにあずかりますが、それでも自分の犯した罪の報いを受けるといことです。厳しい言葉もヤコブの言葉には含まれていました。それらは一言で言えば彼らの懲らしめのためです。彼らの聖めのためです。本来受けるべき罰からすればずっと軽いものですが、それらの報いを味わわされることを通して、彼らの救いは完成させられて行くのです。またその報いはヤコブの直接の子にとどまらず、その子孫にも長く影響を及ぼすものとして語られていることにも注目したいと思います。自分の代では終わらないのです。子たち、孫たち、三代先、四代先、さらに遠くにまで影響をもたらします。とするなら私たちも自分自身の歩みに一層注意しなければなりません。救いはただ恵みによると言っても罪を犯せばその刈り取りはあるのです。それは自分だけではなく、その子孫にも影響を及ぼすのです。神の御前における私たちの歩みはいかに重要であるかを改めて思わされます。

そんな私たちにとって慰めなのは、3つ目として18節の祈りです。ヤコブは子どもたちの将来について語る中で、突如こう祈りました。「主よ、私はあなたの救いを待ち望む。」前後を見ると必ずしも良いことばかりが語られてはいません。そのただ中でヤコブは主を仰ぎ、主が救ってくださることを期待して、そのように祈ったのです。私たちも救いの道を歩む中で自分の罪の刈り取りを強いられるような日々を過ごすかもしれません。苦しい中を通らされるかもしれません。そのただ中で私たちもこのヤコブのように祈って良いのですし、またそうすべきなのです。神が恵みによって救ってくださることを期待し、祈ることを通して、私たちの救いは完成へと導かれ、また神の救いのご計画は実現されて行くのです。

最後 29～33 節にヤコブの死が記されています。ここは簡単に見たいと思います。ヤコブは息子たちにもう一度自分をマクペラの畑地にある先祖の墓に葬ってくれと言います。そこにはアブラハムと妻サラ、イサクと妻リベカ、そしてヤコブの妻レアがすでに葬られていました。これは神がカナンの地を与えてくださるという約束を信じて、私たちは必ずこの地を受け取るのだとの信仰を表したものです。ヤコブはこの時、エジプトで何一つ不自由のない豊かな生活をしていましたが、その心は神がくだ

さるものを待ち望むことの方にあったのです。このカナンの地は神が将来導き入れてくださる天国の写しとしての意味を持つ地でした。ですから神の御国に住むことを熱望し、そのことを信じて一生を終えようとするヤコブの姿がここに 있습니다。

それからヤコブは「足を床の中に入れて、息絶えて、自分の民に加えられ」ました。果たしてこのように静かに、大いなる平安をもって死に臨むことが私たちにできるでしょうか。夜に眠る時には足を床に入れて休むように、そして朝が来れば起き上がることを疑わない人のように、ヤコブは何の心配もせずに足を床の中に入れて自らを神にお委ねしました。こうして彼は地上の 147 年の生涯をついに全うし、先に信仰の生涯を全うした神の民の交わりへと加えられて行ったのです。

以上、創世記もいよいよ大詰めの第 49 章。この創世記は神の祝福で始まりました。神は世界と人間を非常に良いものとして造り、生めよ、増えよ、と祝福されました。しかし最初の人間が罪を犯して、この世界は呪いと苦しみが満ちるところとなりました。しかしこの創世記が閉じられようとする場面で、なお祝福の言葉が語られているのを私たちは聞きます。それは神の契約を担うヤコブを通してです。つまり神の祝福は人間の墮落によって大いに失われましたが、この神の契約を信じ、これにすがって生きる者たちの上になお力強くあるということです。それは言い換えれば神の祝福はこの約束の中心にあるイエス・キリストにより頼む者たちに豊かに開かれているということです。この救いはただ恵みによる救いです。この章で祝福を受けたヤコブの 12 人の子たちは確かに救いの恵みにあずかります。ヨハネの黙示録 21 章 12 節にはやがての天の都にイスラエルの子らの 12 部族の名前が刻まれていると書かれており、彼らが捨てられることなく、神の恵みの御手の中で導かれ、用いられて行ったことが分かります。

この神の祝福にあずかるようにとここを読む私たちも招かれています。神は欠けたところがない立派な人を探し出して救うのではなく、罪ある者たちを、ただご自身の恵みにより、約束のメシア、イエス・キリストを通して救ってくださいます。私たちもこの神の約束を信じ、神により頼み、神の救いと祝福を受け取って歩む者とされたいと思います。自分の罪や弱さに悩むなら、ヤコブの 18 節の祈りのように、主の救いを待ち望む祈りを日々祈って歩む者とされたいと思います。願わくは神の恵みによって良きレガシーを後に続く者たちに残す者となることができますように。そして地

上の生涯を終える時には、確信をもって足を床の中に入れ、主の御国へと導かれる、ヤコブに続く神の民、信仰の民、恵みの民とされたいと思います。